西求女塚古墳第13次調査　見学会資料

平成14年11月3日　神戸市教育委員会

はじめに

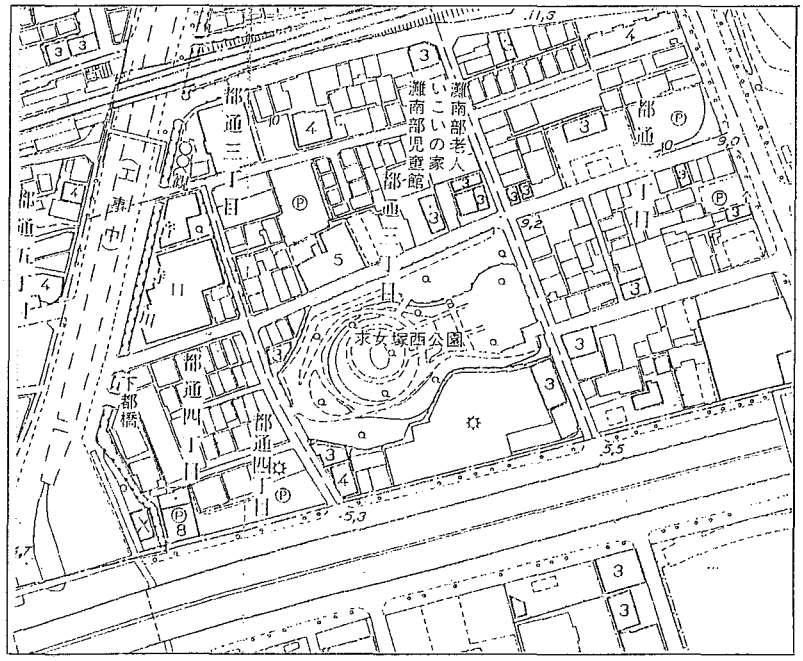
西求女塚古墳は、古墳時代前期（今から約1700年前）に造られた全長約100mの前方後方墳です。東灘区御影塚町に所在する処女塚古墳と、東灘区住吉宮町に所在する東求女塚古墳と共に、古くは奈良時代の『万葉集』に歌われた悲恋伝説の舞台として、古くから多くの人々に知られていました。

昭和61年にはじめて公園内の発掘調査が実施され、その後、古墳周辺部を含めて合計12回の調査がおこなわれました。平成4年度以降は、地元の街づくりのシンボルとして、復元整備の声が上がり、その資料を得るために公園内で、計4回の調査が行われました。これまでの調査では、三角縁神獣鏡7面を含む12面もの中国製の青銅鏡や多くの鉄製品、古墳の上での「おまつり」に使われたり、古墳の周囲に置かれた多数の土器、古墳の表面を石で覆った葺石などが見つかっており、畿内とその周辺における古墳の成立を考える上で重要な古墳であることが判明しました。

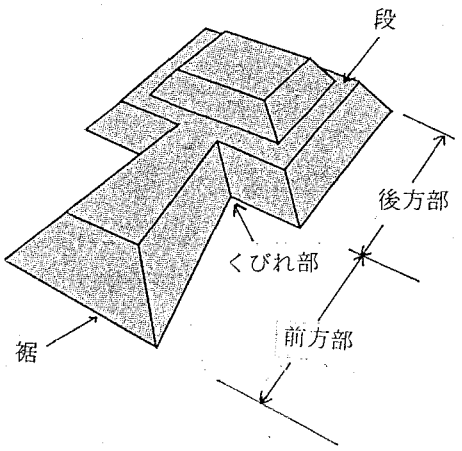
また、1596年（豊臣秀吉の頃）に京阪神を襲った「慶長伏見の大地震」によって古墳の各所が崩れていました。これは、阪神・淡路大震災以前にこのあたりで大規模な地震が起こっていたことを示し、防災を考える上で貴重な資料となりました。

今回の調査成果

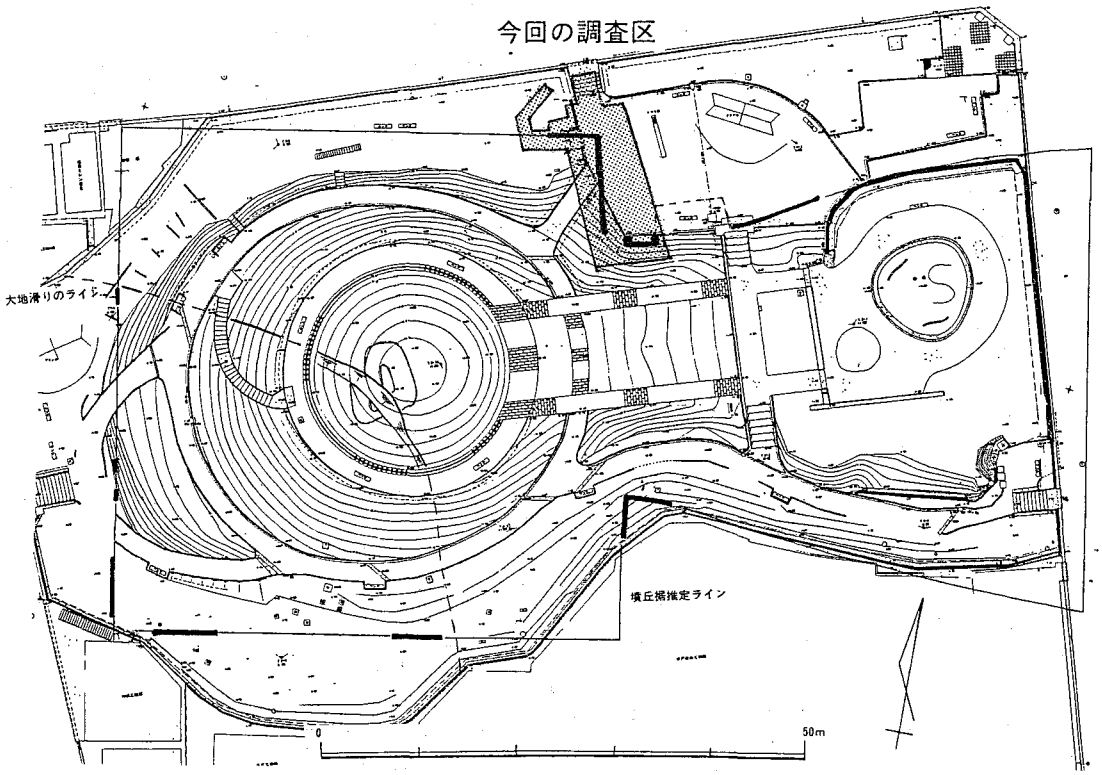
今回の調査は、古墳の北側の形や大きさを確認するために行いました。その結果、くびれ部から後方部の北側にかけては、慶長伏見の大地震によって古墳の盛り土が大きく崩れていることが判り、その下から築造当時の古墳の裾に廻らしていた葺石が見つかりました。そして、後方部裾の北面と東面およびその交差するコーナーが確認され、古墳の形がほぼ確定できました。



西求女塚古墳位置図(S=1/3000)



前方後方墳模式図

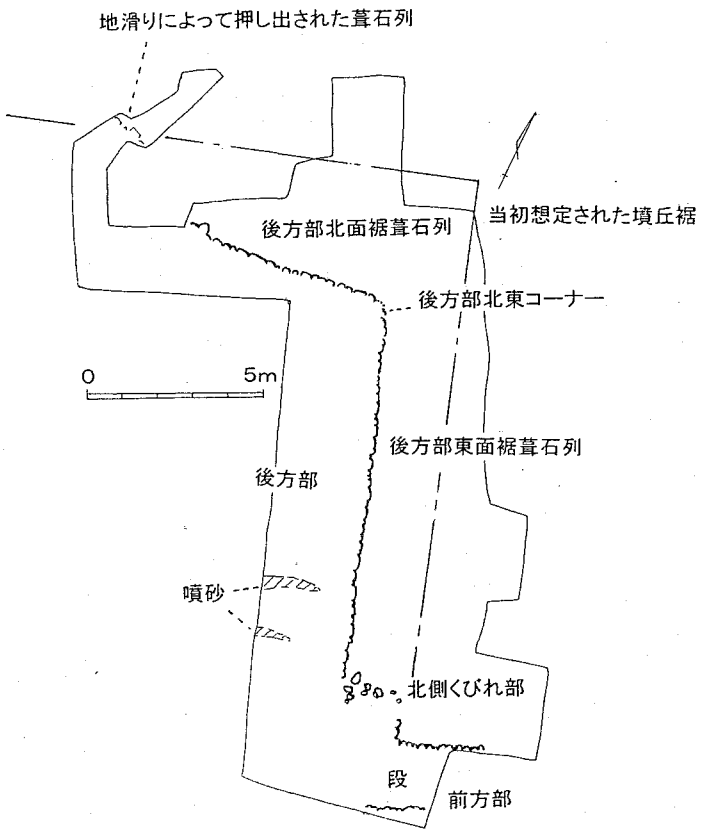


西求女塚古墳全体図(1/800)

葺石は裾から約 50cm の高さまでしか残っておらず、それより上部は地震によって墳丘が地すべりを起こしており、失われていました。使われている石は、北面は一抱えもあるような石を立てて並べており、東面は主に拳大から人頭大の石を石垣のように積んでいました。

また、東面の中央付近では、大きな壷の破片が崩れて落ちた葺石と一緒に出土しており、古墳の上か、斜面の途中の段にこのような壷が置き並べていたことが判りました。

今回の調査により、当初想定されていた後方部北側裾の位置が地震によって外側にずれていたことが判明し、後方部の幅は約 52m、長さは北側では約 50m、南側では約53mと左右対称の形にはなっていないことが明らかとなりました。今後、古墳の形を復元する上で貴重な資料が得られました。



今回の調査区平面図 (S=1/200)